

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 15 日現在

機関番号：33935

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2010

課題番号：22720193

研究課題名（和文）用法基盤モデルに基づく句動詞の共時的・通時的研究

研究課題名（英文）A Synchronic and Diachronic Study of Phrasal Verbs Based on the Usage-Based Model

研究代表者 石崎保明（Ishizaki, Yasuak）

名古屋産業大学環境情報ビジネス学部・准教授

研究者番号：30367859

研究成果の概要（和文）：本研究では、近代英語期における句動詞の使用の実態に焦点を当て、その文献学的・時代的背景を考慮しながら詳細に調査・記述し、そこで明らかになった句動詞の発達過程を、認知言語学理論において標準的に採用されている用法基盤モデル(Usage-Based Model)の観点から説明すること、の2点を目的として研究を行った。研究期間中においては、動詞と不変化詞との意味的結合関係から句動詞を3種類に分類し、それぞれの近代英語期における使用分布や用法を示した上で、その発達過程を頻度効果の観点から説明した。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to describe the historical developments of phrasal verbs used in the Modern English period and to explain them in terms of a Usage-Based Model approach to grammar, which is standardly assumed in Cognitive Linguistics. First, I classified phrasal verbs into three types according to the semantic relationships between the verbs and particles (or adverbs). Second, the historical developments of these types were examined based on the data retrieved from electric corpora. Finally, this study showed that these developments from a perspective of “frequency effects,” which are proposed in the Usage-Based Model.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	140,000	420,000	1,820,000

研究分野：英語学

科研費の分科・細目：3003

キーワード：句動詞、用法基盤モデル、英語史、文法化、イディオム化

1. 研究開始当初の背景

現代英語における句動詞を意味の面からみた場合、(ア)動詞と不変化詞(語彙的意味)の総和から予測が可能なもの(例: go across, sail around)、(イ)動詞と不変化詞(相的また

は文法的意味)の総和から予測が可能なもの(例: chatter away, cut up)、(ウ)構成素の総和からは予測が困難なもの(例: bring up ‘rear’, turn up ‘make appearance’)の3つのタイプに概ね分類することができる。こ

の分類からもわかるように、現代英語の句動詞には、その発達過程において、文法化 (Grammaticalization) とイディオム化 (Idiomatization) という言語変化が深く関わっている。しかしながら、これまでの研究の中で、(イ) タイプまたは (ウ) タイプの句動詞の歴史的発達を個別に扱った研究は散見されるものの、すべてのタイプについて、その歴史的発達を調査し、その結果を、イディオム化や文法化といった現象の関係を整理したうえで分析した理論研究はこれまではなかった。

句動詞の構成要素に目を向けると、句動詞に生起する動詞と不変化詞は、そのほとんどが基本的な動作や空間関係を描写する英語本来語が多いことがわかる。つまり、(イ) や (ウ) のタイプの句動詞は、英語史を通じて、文字通り“慣用”されることによって発達してきたものと考えることができる。このことは、これらのタイプの句動詞の発達が、「発話の場」における頻度効果に着目した用法基盤モデル (Usage-Based Model、以下、UBM) を用いることによって適正に捉えることができることを示唆している。

以上のことを踏まえ、英語における句動詞の歴史的発達を理解するためには、動詞と不変化詞の結合関係に関する実証研究と、文法化・語彙化・イディオム化といった異なる言語変化の現象を、用法基盤モデルに基づいて、統一的に説明する言語変化の理論構築が必要であると考え、このような着想が本研究へとつながった。

2. 研究の目的

Brinton and Traugott (2005、以下 B&T) によれば、文法化は一方向的・漸進的に生産性が増大するプロセスであり、語彙化は一方向的・漸進的に生産性が減少するプロセスであると規定される。また、両者は音声的合併と意味的動機づけを失う点で共通するが、語彙化には、文法化に見られる脱範疇化や意味の漂白が伴わない。この B&T の枠組みにしたがうと、イディオム化には、それが文法化に導かれる場合と語彙化に導かれる場合の 2 種類があり、自由な語結合によって生じる (ア) のタイプを除く句動詞の発達は、そのいずれかに該当するものと考えられる。

近年の文法化研究は、歴史的言語資料の精査による言語変化の記述という伝統を堅持しつつ、特に最近では、言語変化の説明として、「発話の場」を重視する傾向が顕著になっている。一方、UBM は、この「発話の場」という視点を最も重視しており、言語環境における (トークン・タイプ) 頻度を説明の基盤として研究が進められているものの、ごく一部の研究を除き、英語表現の歴史的発達を扱

う研究には応用されていないという現状がある。B&T と UBM は理念的に共有する部分が多く、頻度効果の理論的位置づけを明確にすることにより、両者を理論的に統合することは十分に可能である。その意義は、英語史における句動詞の発達を記述・説明することにとどまらず、現在は独立した現象として研究が進められている文法化・語彙化・イディオム化を扱う理論、UBM、および認知言語学の発展に寄与すると考えられ、句動詞の発達を事例として、新たな文法化・語彙化・イディオム化を統一の枠組みで説明する理論を構築する目的で本研究を行った。

3. 研究の方法

本研究は、句動詞の歴史的発達に対する実証研究と、UBM に基づく句動詞の理論的説明に大別される。

前者においては、先行研究と申請者によるこれまでの調査などから、不変化詞の文法的 (相的) な意味が、中英語期までは十分に発達していなかったことが明らかになっている。これらの先行研究を踏まえて、本研究では、初期近代英語期以降における句動詞の発達に焦点を当てた。具体的には、句動詞が個々の構成要素から予測が困難な意味を持つことや、句動詞に用いられる不変化詞 (副詞) が文法的 (相的) な意味を獲得するには、それらの表現が日常的にかつ頻繁に用いられていたことが予想されることから、電子コーパスなどに収められているテキストの中から、公文書などの形式的なテキストではなく、口語体により近い形で書かれた近代英語期の書簡集や日記といったテキストを用いた。その際、その文献学的・社会学的な背景も念頭に置きながら調査を行い、例文を採集した。

後者 (理論的説明) において、先行研究および申請者がこれまでに行ってきた研究を踏まえて、文法化・語彙化の定義、および普遍的傾向としての文法化における一方向性の想定については、おおむね B&T のそれにしたいが、イディオム化についても、文法化に導かれた場合と語彙化に導かれた場合があるという B&T の枠組みを採用した。ただし、B&T の文法化・語彙化における頻度の扱いが UBM のそれと異なることから、(a) 語彙化の進行において、タイプ頻度の増加は必要とされないが、ある程度のトークン頻度は必要とされる、(b) トークン頻度とは異なり、タイプ頻度は生産性に直接的に関与する、という 2 点において B&T のモデルを修正した上で、B&T の観察を UBM に還元させる形で理論的統合を試みた。

4. 研究成果

本研究の初年度となる 22 年度は、特に *away* や *out* といった同時期における方向を表す副詞の分布を調査し、(1) *out* は、時代を経るにしたがい、トークン頻度およびタイプ頻度を増加させて、その結果として、その文法的機能を獲得していったのに対して、*away* は近代英語期においてもタイプ頻度が顕著に増加することはなく、文法的機能を獲得しているとは言えないこと、および (2) B&T の語彙化・文法化の分類にしたがい、句動詞に見られるイディオム化には語彙化に由来するものと文法化に由来するものの少なくとも 2 種類があり、(ウ) のタイプと (イ) のタイプの句動詞は、それぞれ、前者と後者に分類できることを明らかにした。その内容は、後期近代英語期を射程においた国際会議として英国シェフィールド大学にて開催された「第 4 回後期近代英語における国際会議 (The fourth International Conference on Late Modern English)」において採択を受け、口頭発表した。

ところで、本研究が理論的基盤に置いている UBM は、英語という個別言語の現象のみを説明するための理論ではなく、他言語においても利用可能な理論的枠組みである。そこで、言語が通時的に変化していくくみを、日本語や英語を題材として取り上げながら、UBM をわかりやすく解説した内容を、名古屋産業大学環境情報ビジネス学会編『環境・情報・ビジネスを考える』の第 5 章の中で公表した。

本研究の最終年度となる 23 年度は、用法基盤モデルに基づく *out* を含む句動詞の歴史的発達について、名古屋大学英文学会シンポジウムの講師の 1 人として口頭発表し、初期近代英語期における *out* の発達およびそれに関わる文法化やイディオム化といった言語変化が用法基盤モデルの観点から説明可能であることを示した。

他方、例えば *out* を含む句動詞であっても、その発達は個々の事例によって異なるため、例えば必ずしも *out* を含む句動詞がすべて文法化に由来したイディオム化の事例に分類されるとは限らない。この点を明らかにするため、当該年度の後半は、本動詞である *set* と *out* との歴史的な結合関係の変化に焦点を当て、その発達を調査した。その結果、‘*to start*’ を意味する *set out* は個々の構成要素の総和から全体の意味を予測することが比較的困難なことから、一見したところ語彙化に由来するイディオム化の事例のように見えるが、*set* はもともと副詞を伴わず ‘*to start*’ を表しており、その後 *out* の文法化により *set out* という表現が定着したことから、実際には *out* の文法化に由来するイディオム化の事例であることを論証した。その内容は、

英語の辞書編纂者や英語語彙の発達に関心のある研究者が集まり、英語における歴史的語彙論に焦点を当てた国際シンポジウムである「第 3 回英語の歴史的語彙論における新たな接近法 (The third International New Approaches in English Historical Lexis Symposium)」において採択を受け、口頭発表した。

また、22 年度に英国で口頭発表した内容の一部をまとめたもの 1 編が 23 年に刊行された『名古屋産業大学論集』に掲載された。本論文は、後期近代英語期に英国の北部と南部で書かれた書簡集や日記を資料として、*out* と *away* の文法化の発達状況の異同を記述し、句動詞の発達において、地域差や個人差が表れる可能性を指摘したものである。

加えて、同口頭発表の内容の一部を修正、拡張した内容が、現代言語学の枠組みで英語の記述に焦点を当てたケンブリッジ大学出版 (Cambridge University Press) 刊行の国際雑誌 *English Language and Linguistics* 16 巻 2 号に掲載される予定である。

なお、本研究課題の採択期間、平成 24 年 7 月に刊行予定の中において、本研究に関わるテーマを扱った研究書に対する書評論文 2 編が、全国規模の学会誌に掲載、または掲載が決定した。そのうち 1 編については、日本英文学会の『英文学研究』第 53 号にて掲載され、掲載が決定した 1 編については、平成 24 年 6 月に日本英語学会の *English Linguistics* 第 29 巻 1 号に掲載されることになっている。

本研究を通して、近代英語期における句動詞の歴史的発達が UBM の観点から説明可能であることがおおむね示されたことを受けて、今後はさらに多くの種類の句動詞の発達を考察し、資料のデータベース化へとつながっていきたいと考えている。さらに、今後は、個々の構成要素の意味の総和と表現全体の意味とにギャップが生じる、いわゆる構文化 (constructionalization) とよばれる事例についても調査の範囲を拡大し、これまであまり論じられてこなかったこれらの事例の歴史的発達の過程を詳細に調査し、UBM の観点から考察を進めていきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

- ① Ishizaki Yasuaki (2011) "Distribution of Phrasal Verbs with *Out* and *Away*: With Special Reference to Two Late Modern English Corpora" 『名古屋産業大学論集』第 18 号 pp.71-75. (名古屋産業大学環境情報ビジネス学会) (査読

無)

- ② Ishizaki Yasuaki (2012a) 「Review : 対象図書 : Kathryn Allan 著、*Metaphor and Metonymy: A Diachronic Perspective*」、『英文学研究』、第 53 号、137-144. (日本英文学会) (査読有)
- ③ Ishizaki Yasuaki (2012b) 「Review : 対象 図 書 : Muriel Norde 著、*Degrammaticalization*」 *English Linguistics* 29 巻第 1 号 (日本英語学会) (査読有、24 年 6 月に刊行予定)
- ④ Ishizaki Yasuaki (2012c) “A Usage-Based Analysis of Phrasal Verbs in Early and Late Modern English,” *English Language and Linguistics* 16.2 (Cambridge University Press) (査読有、24 年 7 月に刊行予定)

[学会発表] (計 3 件)

- ① Ishizaki Yasuaki (2010) “A Usage-Based Analysis of Phrasal Verbs in Early and Late Modern English,” The fourth International Conference on Late Modern English, (於 The University of Sheffield, UK)(査読有)
- ② 石崎 保明 (2011) 「言語使用と文法化 : 用法基盤モデルの観点から名古屋大学英文学会第 50 回大会記念シンポジウム「文法化の要因を探る」(於 名古屋大学)(査読無)
- ③ Ishizaki Yasuaki (2012) “Idiomatization and Grammaticalization in Phrasal Verbs in Modern English,” The third International New Approaches in English Historical Lexis Symposium, (於 University of Helsinki, Finland) (査読有)

[図書] (計 1 件)

- ① 名古屋産業大学環境情報ビジネス学会編 (2011) 『環境・情報・ビジネスを考える～名古屋産業大学の教育・研究』 (石崎保明ほか 16 名、執筆担当箇所 (単独) : 第 5 章「ことばの変化の認知的メカニズム」 pp.92-113、名古屋産業大学環境情報ビジネス学会編中日新聞社.

6. 研究組織

(1)研究代表者

石崎保明 (ISHIZAKI YASUAKI)
名古屋産業大学環境情報ビジネス学部・
准教授
研究者番号 : 30367859